



自然を歩く 21

篠原 徹

【芋車と近代】

時代が移り変わり生活の風景の中で消えていったものは多い。山里を歩いていて炭焼きと水車などはみかけなくなつた典型だろう。精米・製粉用の水車は私が山村を歩きはじめた45年ほど前にはもう珍しい存在であつたが、揚水用の水車は岡山県や広島県の山間部ではまだ現役のもののがかなりあつた。水車は日本の近代の前半がもつとも全国で台数が多かつたということは意外に知られていない。いろいろな水車のなかで、私が好きなのは清流のなかで頭を出している2つの石の間に置くだけの小さな芋車と呼ばれている水車である。野良仕事に忙しいとき夕飯用に里芋を入れておく。芋車のなかで芋同志が擦れあつて皮が剥ける。里芋を剥くと手が痒くなるが、それを避けることができる。生活の知恵なのであるが、清流にこれが回っている姿は風情のあるもので、山里への郷愁を喚起する。さすがにこんなものは俳人は目に留めないだろうと思つていたら、虚子に「小国町南小国村芋水車」があつた。私は、より小さきものである芋車などに失われていくものへの哀惜を強く感じる。